

学位論文題名

Gender differences in the contributions of risk factors to depressive symptoms among the elderly persons dwelling in a community, Japan

(地域在住高齢者の抑うつ症状に寄与する危険因子の性差に関する研究)

学位論文内容の要旨

緒 言

うつ病は高齢者において最も起こりうる精神障害であり、主な自殺の原因となっている。地域在住の高齢者を対象とした研究報告によると、診断基準に基づいた大うつ病の有病率は1%から6%であり、スクリーニング尺度に基づいた抑うつ症状の割合は、16%から39%である。

高齢者の抑うつ症状に関連する危険因子の特定は、地域におけるうつ病の適切な予防事業の展開ならびに、治療に対する正しい知識の普及などに重要である。先行研究によって、女性は男性に比べてうつ病に罹りやすいということは明らかにされているが、抑うつ症状に関連する危険因子の重要性に男女差があるかどうかは分かっていない。本研究において、地域在住高齢者を対象に、抑うつ症状に関連する危険因子の相対的重要性の違いおよびその男女差を検討した。

研 究 方 法

本研究は、65歳以上の高齢者の健康状態を調査する目的で毎年実施している南富良野町高齢者実態調査の一環として行った。2004年2月に精神的健康に関する調査を実施し、引き続き、6月に身体的および社会的健康に関する調査を行った。2004年1月21日現在、南富良野町に住民登録をしている65以上の高齢者822人のうち、施設入所者、入院患者を除く731人(89%)に対して、第1回目の自記式調査票を配布した。さらに、第1回目の調査参加者688人のうち、665人に対して第2回目の調査を実施した。調査項目は、30項目高齢者抑うつ尺度(GDS)による抑うつ症状、基本属性(年齢、性別、婚姻状況、教育歴、経済状況)、身体的健康(日常生活動作、老研式活動能力指標、慢性疾患の既往歴、アルコール依存性、視覚および聴覚障害、関節痛の有無、主観的健康観)、ストレス(全体のストレス状態、ストレスのある出来事の経験)、ソー

シャルサポート(家族や親戚との連絡の有無、友人との連絡の有無、社会活動への参加、信頼できる人の有無)である。

研究結果

平均年齢は 73.9 (標準偏差 6.4) 歳で、年齢範囲は 65 歳から 98 歳であった。婚姻状況、アルコール依存、聴覚障害、関節痛、全体のストレス状態、親戚および友人との連絡の有無、社会活動への参加において、男女間に有意な差が見られた。GDS スコアの平均得点は 10.9 (標準偏差 6.2) であり、女性の方が有意に高得点であった。

基本属性が GDS スコアの変動を説明する割合は、男女とも約 4%であった。身体的健康、ストレス、ソーシャルネットワーク項目をそれぞれ追加したモデルの寄与率は、男性では 24.8%、23.1%、15.2%、女性では 26.8%、13.9%、11.1%であった。さらにそれぞれの項目を追加したモデルでは、男性 38.5%、28.8%、30.9%、女性 31.1%、29.7%、20.1%の変動を説明した。すべての項目を含むモデルの寄与率は、男性 41.9%、女性 33.7%であった。

男性においてはストレス項目、女性においては身体的健康項目が GDS スコアの変動を最もよく説明することが分かった。

考察

女性はストレスフルな状況に対する処理能力が男性に比べて劣り、特に自分自身に起こった問題により敏感であるという調査報告がある。しかしながら、今回の調査では、男性におけるストレス項目は女性におけるそれと比べて、抑うつ症状を説明する割合が高いという結果であった。これは、女性の方がストレスに対する適用力があることを示唆している。

本研究において、地域在住高齢者における抑うつ症状への危険因子の寄与率はそれぞれ異なり、男性においてはストレス項目、女性においては身体的健康項目が主な危険因子であることが分かった。今後の研究において、これらの危険因子への対策が地域在住高齢者のうつ病を予防するかどうか検討する必要がある。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 三 浪 明 男
副 査 教 授 前 沢 政 次
副 査 教 授 玉 城 英 彦

学 位 論 文 題 名

Gender differences in the contributions of risk factors to depressive symptoms among the elderly persons dwelling in a community, Japan

(地域在住高齢者の抑うつ症状に寄与する危険因子の性差に関する研究)

申請者は、南富良野町地域在住高齢者を対象に、抑うつ症状に関連する危険因子の相対的な重要性の違いおよびその男女差に関する研究を発表した。まず、危険因子を4つのグループに分け、各グループが高齢者抑うつ尺度(GDS)によって測定された抑うつ症状にどれくらい寄与しているかについて重回帰モデルを使って分析した。また、各グループの追加によりどれくらい寄与率が増加するかを示した。その結果、南富良野町地域在住高齢者における抑うつ症状の変動への寄与率は危険因子グループによって異なり、男性においてはストレス項目、女性においては身体的健康項目がGDSスコアの変動を最もよく説明することを明らかにした。つまり、南富良野町地域在住高齢者のうつ病を予防するためには、男性においてはストレスフルな状況、女性においては身体的健康に注意を向けることが重要であることを示した。

公開発表では、最初に主査の三浪明男教授から、GDSは項目数が多いため無回答が多くなるのではないかということと、それを原因とする回答の信頼性や信憑性について質問があった。申請者は、調査が南富良野町と共同実施されたことで、回答が困難な対象者には在宅に訪問しているホームヘルパーなどの手助けがあったこと、無回答項目がある対象者には、電話や訪問によるフォローアップにより無回答の項目数を最小にしたと回答した。次に、抑うつ症状と自殺との関連性の質問に対して、うつ病患者は10倍自殺する危険があることと、ケースコントロール研究において自殺したグループと対照グループの自殺に対するオッズ比は30以上であることを示した。また、南富良野町では縦断研究として抑うつ症状の調査が引き続き行われているので、今後、自殺と抑うつ症状の関連が明らかになると回答した。さらに、男性におけるストレス、女性における身体的健康という危険因子への対策について質問があった。それに対して、抑うつ症状とそれらの危険因子の因果関係は不明なので、まずその因果関係を明らかにし、危険因子を持つ高齢者に、ホームヘルパーや保健師などが在宅でケアをすることで事前に抑うつ症状を予防することができるのではないかと回答した。

続いて、副査の前沢政次教授から主に3つの質問があった。初めに、アルコール依存症をなぜCAGEを用いて測定したかという質問に対して、精神科医からのアドバイスでアルコール依存症について測定する必要があることと、CAGEは4項目しかなく高齢者には回答し

やすいため採用したと回答した。次に、女性はストレスに対して適応力があると結論付けているが、南富良野町の高齢女性だけではないかという質問に対して、1970年代は女性の方がストレスに弱いとされていたが、1980年以降は女性の方がストレスに強いのではないかという報告がなされている。今回、高齢者に対しても同様な結果であったので、女性はストレスに対して適応力があると言えるのではないかと回答した。さらに、今後の縦断研究計画への質問に対して、2005年6月の調査では男女とも2004年2月の調査と比べてGDSスコアの平均値が下がっていることから、抑うつ症状の季節変動を検討していく必要があると回答した。

最後に、副査の玉城英彦教授から5つの質問があった。まず、欠損項目が全体に与える影響を考慮したかという質問に対して、性別は影響がないが年齢はバイアスが生じているので、欠損値について統計処理により対象者全体の近似像が見られると回答した。次に、年齢によりGDSの変化はあるかという質問に対して、男性では年代による変化は見られないが、女性では80歳以上でGDSスコアが高いという結果を示した。さらに、その年齢による変化がモデルにどのように影響しているかの質問に対して、女性において身体的健康が抑うつ症状への寄与率が高いのは80歳以上のグループが影響しているかもしれないことと、今後、性別だけでなく年代別にも解析する必要があると回答した。次に、危険因子の残りの寄与率を説明する危険因子は何であるかという質問に対して、抑うつ症状の既往歴、うつ病の家族歴、ソーシャルサポートの不足などが考えられると回答した。最後に、この結果を南富良野町でどのように活かしていくか質問があった。それに対して、すでに行った広報誌への掲載とハンドブックの配布について資料を用いて説明し、縦断研究で、自殺率の低下への寄与を検討すると回答した。

本論文は、南富良野町地域在住高齢者の抑うつ症状とその危険因子の関連を研究し、潜在的危険因子を男女別に示した。今後の縦断研究において危険因子を特定することで、南富良野町における抑うつ症状やうつ病対策の一助となることが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や単位取得なども併せ申請者が博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。